

第一次花熟里遺跡調査報告

河口貞徳

出口浩

1. 調査経過



第1図 遺跡の位置(黒点)

花熟里遺跡は昭和43年2月18, 19日吹上町中原の国道270号線の道路の付けかえ工事中、工事現場を通りかかった吹上高校社会研究部の生徒によって発見された。

道路の断面に堅穴十数個を発見し、その堅穴群の中から炭化米らしきものを

発見したと通報があった。さっそく鹿児島県文化財保護専門委員河口貞徳氏と、ラ・サークル高校教諭の上村俊雄氏がこの事実を確認するため現地を調査した。

その結果、工事現場の道路断面に露出している堅穴住居址群は十数個で、いずれも地表から約1m余りの深さにあり、直径3~5m、堅穴の深さは約40cm程度である。それらの遺構からは、弥生後期(成川式該当)の土器を採集することができた。その堅穴群のひとつに、上部が狭く、底部の広い袋状の堅穴があり、その底部から約6リットルの炭化米を発見した。

以上の事実から弥生時代および古墳時代の初期にかけての遺跡であることを知った鹿児島県史跡調査会では南九州における弥生文化の様相、稻作農耕文化の伝播、土器型式の編年をさぐるため同年8月5日より15日まで15日間発掘を行なったのでその結果をまとめて報告することにしたい。ここにこの調査に参加した人をあげて感謝の意を表したいと思う。

河口貞徳(鹿児島県文化財保護専門委員)、池畠耕一(岡山理科大学学生)、児玉節子(鹿児島大学学生)、吹上高校社会研究部(堀ノ内悟部長 外15名)、玉龍高校考古学部7名の人達である。なお、花熟里遺跡の名称については、最初の吹上高校生の発見以来花熟里と称してきたが、地名からいえば中原部落に属し、花熟里部落は北西約2kmにある。しかし発見以来、花熟里遺跡の名称で親しまれているため花熟里遺跡とした。

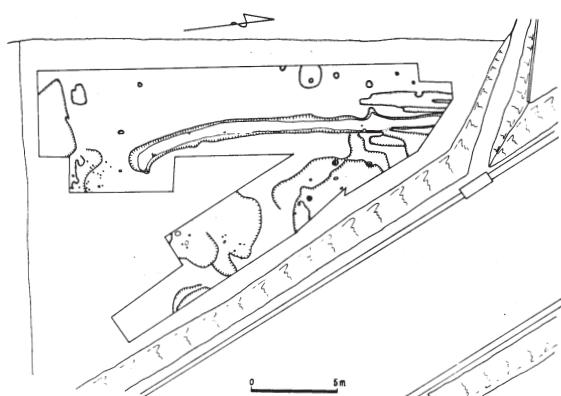
2. 遺跡の位置

花熟里遺跡は児島交通線（旧南薩鉄道）吹上浜駅より東方約1km、日置郡吹上町中原部落にあり、池畠国男氏所有の畠地である。吹上浜海岸線より直線距離にして約2km、吹上砂丘の内側の台地に位置している。しかし遺跡地は砂丘ではなく洪積台地に成立した遺跡である。標高約42mの地点に立地し、南に中津部落をはさんで薩摩湖、正円池や湿地帯がひろがっている。遺跡地は国道270号線をはさみ、東西の畠地に広がるものと思われるが、今回は西側の芋畠を発掘した。同畠地には多量の遺物の散布がみられ、地主は過去土器片を多様集めて捨てたとのことであった。現在においても地表面に土器の散布がみられ、東側へ約1km、下田尻十文字から多宝寺へ抜ける農道を歩いてみると弥生式土器や石器を採集することができる。

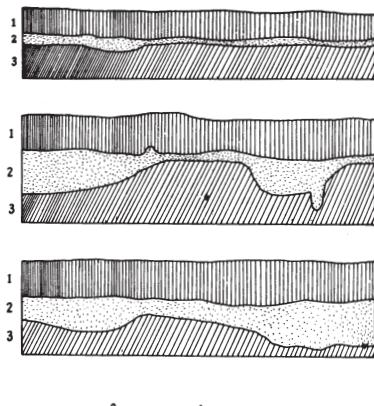
3. 調査の概要

最初 Aトレンチを南北に $2 \times 10\text{ m}$ 設定し、北より1～10区と区割した。Bトレンチを3mにおいて東側に $2 \times 6\text{ m}$ 設けた。発掘にしたがいピットや溝状遺構、住居址を明らかにするため、Aトレンチを南側と東側に $4 \times 15\text{ m}$ にあたる面積の拡張区11区～24区を設けた。

さらにAトレンチとBトレンチの間にCトレンチとして $3 \times 4\text{ m}$ 、国道ぞいにDトレンチ $2 \times 10\text{ m}$ 、南より1～5区、その西側にEトレンチ $2 \times 6\text{ m}$ を設けた。D EトレンチはさらにはAトレンチ19、20区まで拡張しA区と接続した。



第2図 花熟里遺跡平面図



第3図 トレンチ断面図

上 Aトレンチ1, 2, 3区西壁断面図

中 Aトレンチ13, 14区南壁断面図

(右、溝状遺構の断面、左、1号住居址断面)

下 Dトレンチ3, 4区東壁断面図

(右、住居址断面)

層位は（第3図）、第1層の黒褐色層は45～55cm位で略水平。第2層の黒色土層は1.0～2.0cm位で略水平。第3層は黄褐色の基盤層となっており、全般に明確に表わすことができる。第1層は弥生式土器片や土師器、須恵器、現代陶器片など混在し攪乱層である。土器片も磨滅がはげしい。第2層は弥生式土器の包含層である。一部攪乱されたところもあるが、第3層の基盤に接するところでは大きい土器片があらわれ、明確な包含層と思われる。

以下トレンチごとに概要を述べる。

(1) A B C トレンチ

ア 溝状遺構

A トレンチ1区より10区において長方形、円形の落ち込みが約10個あらわされた。そのうち5個は1層の黒褐色層が第3層黄褐色層までに堀りこまれており、遺物も現代陶器片などのまざった攪乱層であるため芋穴と判定し、その穴だけ土を埋めもどした。以後Bトレンチ2・3区、Aトレンチ11・12・13区に1層から3層に達する掘り込みが隨所にみられたが芋穴であるため記述を省くことにする。ここではAトレンチ11区よりBトレンチ3区にわたって続いている溝状遺構について述べたい。

11区北断面にあらわされた落ち込みは、地表より深さ、西側48cm・東側40cm・底面76cm・巾1m20cmの台形である。その上に深いところでは30cm、浅いところで10cmの黒色土層がひろがっている。すなわち第3層に掘りこまれた溝である。この溝はAトレンチ13・14区では(第3図)柱穴と推定される掘り込みをのこし、南にむかって長さ約17m70cm・巾70~1m50cm・底面巾35cm~70cmの弱い弧状で伸び南端部は東へ彎曲し、Bトレンチ3区で終っている。溝中にはまとまった土器がてんてんと出土したが、土師・須恵の出土は認められなかつた。

この遺構の本来の機能については集落の境界としての施設、排水溝、灌排水溝、対人的ないし対獣的防御施設としての濠、魔除けの施設、あるいは往時の村落制度の遺構など、多くの見解が出されているが、いずれの説にも疑義や難点があつて定説がないといわれております(註1)この遺跡においても、この溝を北へ追求し、集落全体の様相を明らかにした上でないと、溝の性格を述べるにはまだ資料の不足を感じるものである。

イ 堅 穴

A トレンチ15・16・17区にある方形の堅穴は住居址かどうかは明確でなく、単に堅穴として記述する。15・16区は第2層がかなりあつく、16区東南端で深さ60~70cmをなし、地表より1m20cmの深さにある。堅穴は地表より80~1m20cmの深さに掘り下げられている。平面は略方形をなし、北の東西巾4m~4m50cmで東南へ傾斜しながら広がる。北へ60cmへだてて東西1m40cm南北70cmの方形の浅い掘りこみがみられる。この堅穴の2層上部から多量の土器片が出土した。上部には土師、須恵などを含んでいる。堅穴の床面には、まとまった遺物がなく後述する1号、2号住居址とちがっている。

なお、A トレンチ1区・2区・3区に6個の柱穴と推定されるものや、B トレンチ1区には、3層面に20~25cm掘り込まれ南西方向へひろがる堅穴に、内に6個、堅穴外に16個の直径5~20cmにわたる大小の柱穴らしいものがあらわれている。

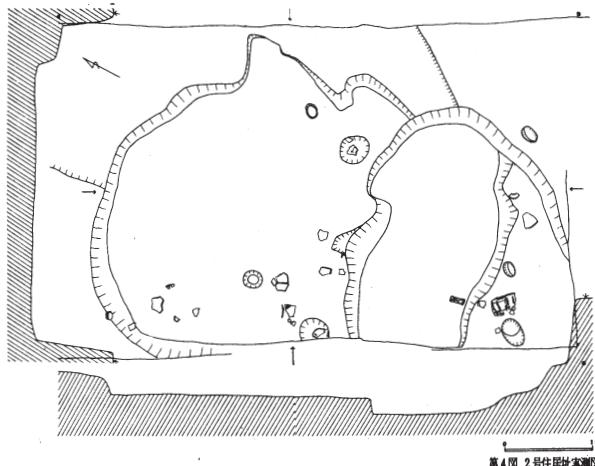
ウ 1号住居址

A トレンチ拡張区14・19・20・23区の東側にかけて出土した住居址を1号住居址とし、Eトレンチ1~4区、Dトレンチ3~5区にかけて出土した住居址を(第4図)

2号住居址とする。1号住居址はまだ東方へ広がるものと思われるが、道路に面しており、発掘不可能で不明である。住居址は3層に掘り込まれ、Aトレンチ14区北東の断面より、縁辺より15~20cm、さらに床面は40cmと2段に掘り込まれていることがわかる。掘り込みの上段部は、西側で巾50~60cmで溝へ浅くつながっている。プランは円形ないし長円形と推定される。床面からは多量のまとまった土器や砥石を出土している。

(2) D, Eトレンチ

ア 2号住居址(第4図)



Dトレンチ3~6区、Eトレンチにあらわれた住居址で南西方向へ、まだ広がるものと思われる。

地表面から約50cmの深さにあり、3層上面から20cm~25cmの深さで掘り込まれ、南側のプランはそれよりもまた約20cmの落ち込みをなしている。プランはふたつの不正円形が重なった複雑な形であらわれているが、これがひとつのかつての住居址か、ふたつの住居址

が重なったものであるかは不明である。全体としてはやはり円形とみなすべきであろう。

南側の落ち込みには鉄斧(第13図)や底部を欠いた甕形土器(第11図40)がほぼ完全な形であらわれ、住居址の時期を推定するのに重要である。また北側のプランは東側へ張り出しがみられる。住居址外1個、住居址内6個、直径15~30cmの大小の柱穴と思われるものが確認されている。

イ Dトレンチ2~3区にかけ東側断面近くにも落ち込みがあらわれ(第3図)、住居址と推定されるが、東方道路側へ広がるため不明である。3層上面より最深部で約40cmの掘り込みが確認され、円形をなすものと考えられる。

4. 遺物

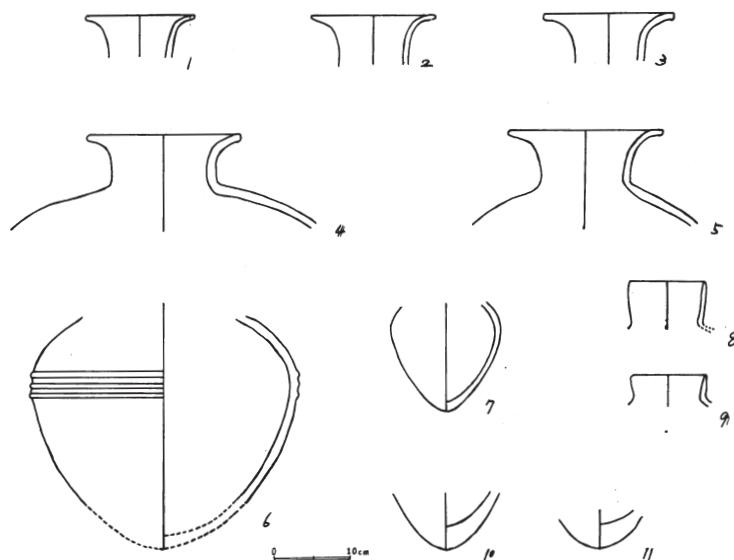
(1) 土器

1層、2層より多量の土器が出土した。全般に小さい破片が多く、特に1層においては、磨滅が激しく表面の判然としないもの多かった。2層においても同様に小さな破片多かったが、2層下部、3層直上においては、まとまった土器が多く出土した。特に住居址と溝中において多くの土器をみた。おもに弥生後期の土器であるが1層・2層上部においては土師器、須恵器の破片を含んでいる。明確な区分はできないが、2層の上部と下部において、二つの型式に分けられると思われる。

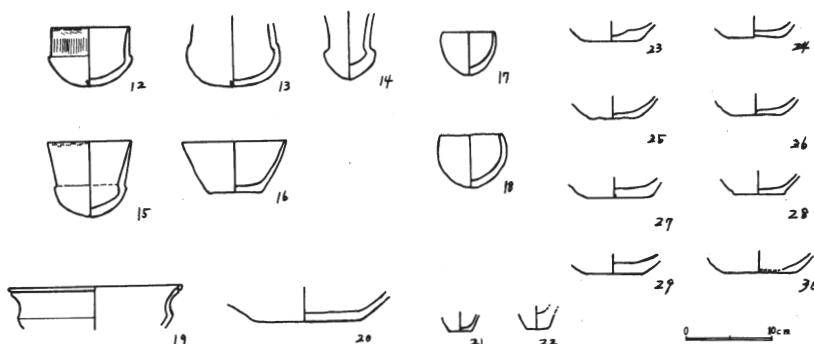
ア 壺形土器

・ 1類 (第5図1～6, 第6図2～9・11)

この壺形土器は、一般に焼成は良好で器面は刷毛目で良く調整され、黄褐色、または赤褐色を呈している。内面の器壁がはげて砂粒が露出したものがみられる。器形は肩部が張り、丸底あるいは尖り底と思われる底部を持った器体に直立する短かい頸部をつけ、口縁部は大きく外反する。器体の最大径をなす肩部に2～3条の三角凸帯をつけるのを特徴とする。頸部と肩部の境い目は、内面につなぎ合わせた技法のあとが明瞭で、ややふくらみを持ち、つなぎ合わせの線を有している。直立する頸部と大きく外反する口縁部にも同様の線がみられる。第7図4・6は住居址面からの出土である。



第5図 花熟里遺跡出土の土器実測図



第8図 花熟里遺跡出土の土器実測図

• 2類(第7図12~19)

肩部に刻目のある凸帯を2条~3条有するのを特徴とする。器体は不明であるが、黄褐色で砂粒をふくみ刷毛目で調整された肩部に三角形及び台形の凸帯をはりつけ、筒状のもので刻目をつけたものである。深く荒い刷毛目で器面を調整し、茶褐色をした粗製の土器の肩部へ2~3条の凸帯をはりつけ縄目状の刻み目をつけたものもある。

(3) 溝および住居址からも出土している。

- その外7図7のような薄手で倒卵形の器体を有し、底部は尖り底を有するものや、小型の壺で直立した短かい口縁を有するもの(第7図8・9)などがある。第8図10は頸部と肩部の境目に三角凸帯をつけたものである。

イ 鉢形土器(第8図16・20)

16は口径12cm、高さ6cmの小形のもので、小型壺形土器の群中にはいるものと思われる。精良な粘土を使用し、器面もよく調整され、黄褐色を呈する薄手のものである。

20は褐色を呈し、焼成よく精製研磨された薄手のもので底部と思われる。煮沸の跡を認めない。

ウ 高壺形土器

溝中やB区より出土しているが、いずれも脚部の杯部に接する部分の破片である。研磨された筒状のもので底部にいたって大きく開くものと推定される。

エ 龜形土器

- 1類(第9図31~54)



第6図花熟里遺跡出土の土器実測図

この龜形土器は花熟里遺跡において、もっとも多く出土するものである。粗製で内面は茶褐色を呈し、外面は黒褐色をなし、器面には煤が附着している。胎土は砂粒を含み粗である。内外ともに刷毛目で、斜めやたてに調整している。34のごとく肩部に稜線をみせ、それを境に上部はたてに、下部は横に調整するものもある。

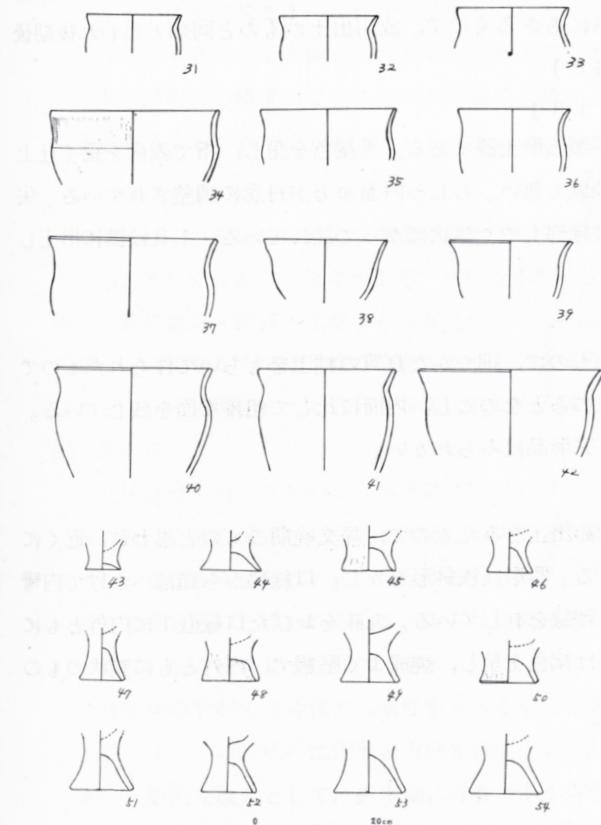
器形は肩部から口縁部へかけて、やわらかく「く」の字形に外反し、口縁端は「コ」の字状に角ばっているのを特徴としている。口径が最大径をなすもの(38・39・41・42)と肩部がふくらむもの(33)口径と肩部の径がほぼ同じもの(31・32・34・35・36・37・40)がある。底部にかけてやわらかくすぼまり、底はあげ底を呈しているものと思われる。(43~54)40は2号住居址の鉄斧のそばから出土した(図版3)ものであるが、



第7図 花熟里遺跡、出土の土器実測図



第10図 花熟里遺跡出土の土器実測図



第9図 花熟里遺跡出土の土器実測図

底部が欠けている。底部は中空の上げ底をなし、あらい器面をやや深い刷毛目で調整したもの(48)や、指で調整のあとを残すもの(45・50)などもみられる。器面は茶褐色を呈し、煤の附着は認められない。器体の丸底の下面に、中空の上げ底をはりつけ整形した手法が、脚台の割れ目より推察される。中空の上げ底の小さい43のごとき小形の底部もみられるが、時期的に古いものであろうか。

• 2類(第10図20~32)

この甕形土器は「く」の字状に外反する口縁部をもつ頸下部のくびれた部分や、バケツ状に直立する口縁の頸部に凸帯を付し、へら状のものできざみをほどこしたもの(20~29)と刻目のない三角凸帯をつけたも

のである。（30～32）2層上部の方で比較的多くみられ、1類の甕形土器よりも新しいと思われる。完形品は出土しなかったが、1類と同じく中空の上げ底をもつものと思われる。（註2）黒褐色や茶褐色を呈し、胎土は砂粒を含み粗である。表面は内外ともに刷毛目で荒く調整している。29は凸帯が大きく、三角凸帯というよりも絡繩状凸帯といべきもので21・23・25・28と共にきざみ目を持った笠状のもので斜めに刻目をほどこしている。頸部から口縁部にかけて20・24のごとくやわらかく外反するものと21・23のごとく直立するものがある。

オ 小型壺形土器（第10図12～15 第8図1）

精良な粘土を用い、紅褐色、黄褐色を呈する小型の土器である。器面は細やかな刷毛目で、口縁下部は横に、頸部は斜めや縦にきれいに調整し、丸底の底部は研磨されている。器形は丸底の底部に短かい円筒形の頸部をつけたもの（12・13）。頸部が円筒状にやや外びらきになるもの（15）がある。また14のごとく底部が尖り底をなし実用のものには供しがたいと思われる焼成堅緻で、良く研磨されたものもある。第8図1は、これらの土器と同じく、小形で薄く、茶褐色を呈した口縁部であるが、口縁直下に小さい沈線を有し、その下に連続山形の沈線文を2条ほどこしている。これらの土器は南九州弥生式土器集成のV様式、小型壺形土器のBにあたるもので、成川出土のものと同類と思われ後期後半に位置するものである。（註3）

カ 小型手捏土器（第10図17・18）

口径6cm、高さ6cmの小型の粗製壺形土器である。黒褐色を呈し、指で表面を荒く仕上げた感じのもので、胎土も粗で焼成も悪い。むしろ内面の方が丹念に調整されている。尖り気味の丸底をなし、内彎する口縁部もやや波状になって乱れている。18は溝に出土したものである。

キ 土師器（第10図23～30）

この土器は白っぽい褐色をしたもので、細やかな良質の粘土をもちいて作られたものである。底部には例外なく糸切り底のあとをのこし、内面に比して粗雑な面を残している。

底部直径6cm前後のものが多く完形品はみられない。

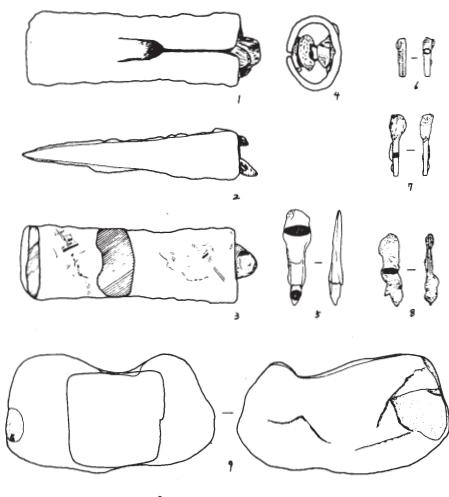
ク 繩文式土器（第10図19）

A-14-1より、わずか1片の出土をみたもので、繩文晩期のものと思われ、近くに繩文の遺跡のあることが推定される。器形は浅鉢形をなし、口縁部から頸部へかけて内彎し肩部で「>」の字形に屈曲し、稜線を有している。丸味をおびた口縁直下に内外ともに沈線を1条めぐらしている。器面は褐色を呈し、焼成よく堅緻で、内外ともに笠状のもので丹念に研磨している。

(2) 石 器（第11図9）

・ 砧 石

この遺跡においては、たたき石数個をのぞき、石器の出土がなく弥生後期の南九州地方という後進地域における石器の消滅と、鉄器の普及がうかがわれる所以であるが、ただひと



第11図 花熱里遺跡出土の鉄製品と石器
1裏面 2側面 3表面 4柄部

つ、1号住居址の床面より砥石と思われるものを出土している。

泥岩質の丸みをおびた石の一面がくぼみをなし、砥石として使用されたものと思われる。他の一面はたたいて使用したあとがみられ、たたき石としても利用されている。

(3) 鉄器(第13図1~8)

鉄製品は5個出土した。とくに鉄斧は(1~4、図版4)Dトレンチ1区2層に出土し2号住居址出土の甕形土器(第11図40)と50cm離れて出土した。(図版3)長さ15cm巾4.7~5.2cm、厚さ中央部2cm、柄部の直径、横5.2cm、たて4cmである。柄部は厚さ5mmの鉄を楕円形に折り曲げて、木柄を挿入する袋部を作っており、その中に強靭な木柄がおれてしまっている。以上の状態より鍛造品と考えられる。

袋部を作るためのおり曲げられたところを下にして発見されたが、上部には藁ないし、むしろ状の植物性の纖維のようなものが固着し、鋸とともにかたまっているのがみとめられる。その他5~8の鉄製品が出土し、5はまるい、7は方形の短かい基部を有している。

5. 考察

本遺跡はその発見の端緒より多量の炭化米を有するものであり、弥生後期における農耕文化の様相とそれにつながる集落の形態、後期土器編年上の問題をさぐる遺跡といわれていた。住居址や溝状遺構・鉄斧・土器などの発見によって弥生後期における薩南西部海岸地方の集落の様相の一端を知る上では重要な遺跡であるといえよう。そこで住居址・溝状・遺構・鉄斧・土器などについて現在までの資料を参考にしながら考察をくわえてみたいと思う。

(1) 住居址

住居址は1号・2号の2つが確認されたわけであるが、1号は東側を道路工事によって切断され、2号は調査の時間的な関係から両者とも約2分の1の面積を調査したにとどまった。

しかしながら全体の形状を推定することはさほど困難ではない。おそらく円形または楕円形を呈するものと思われる。また1号は2段の掘り込み、2号は南側に1段深い掘り込みがなされ、深さは40~50cmである。

住居址の形制では時代や地域性をもっともよくあらわすのは平面形態といわれている。

(註4) この時代には円形と方形を両極として、その間にいろいろな中間的な形態があるが、一般的な観念として、終末期には長方形か方形かに統一されてくると考えられている。

その意味からおしはかれば1・2号の平面形態はやや複雑な形をしており、終末期の統一されたものとは考えられない。こころみに後期後半といわれる鹿児島県立医大遺跡(註5)

の住居址はみごとな円形住居址である。1号にみられる2段の掘り込み、これに類似するものは、やや飛躍するが、東京道灌山遺跡に1号住居址というものがあり、幅60～70cmで床面よりも1段高い部分が検出されたとして、調査者は寝所と考えている。また兵庫県大中遺跡、福岡県裏山遺跡ではベッド状の床と考えられ、弥生末期に西日本に普及した形態であると述べている。(註6) しかしながらこの遺跡の場合2段になっているという共通性はあるにしても、中心に向かってゆるやかな傾斜をなすこと、住居址の縁辺にそって凹凸を有していることから、とうてい寝所とは考えられない。また2つの平面形態の特徴とするところは住居址縁辺部から外側へ浅く、幅50～60cmではり出しを持っていることである。

1号は西側へ伸び溝へ接し、2号は東側へのびている。これが何を意味するものであるか全く不明であるが、ここではこの事実だけを強調しておきたい。

(2) 溝状遺構

長さ	17m70cm以上
上部幅	70cm～1m50cm
下部幅	35cm～70cm
深さ	30cm～50cm
平面形態	弱い弧状
断面形態	梯形

溝状遺構の形態は先に述べたが、ここではその機能から集落について論述してみよう。

溝状遺構の起源は縄文時代の後期初頭から始まるといわれ、その盛行したのはやはり弥生時代になってからである。平地、丘陵、台地の村落にまで設けられ、形態も各種各様で種類に富んでいる。古墳時代および平安時代までも続いていることが調査の結果判明しているという。(註7)

さて、その機能については前述したようにあきらかな定説というものはないが、おおかたに考えられている集落区分という立場にたって考えてみたい。

本遺跡における溝状遺構は発掘結果からは17m70cmを表わしたがこれは全体ではない。おそらく北方へ伸びるとも予想される。南端はゆるく南西方向へ湾曲して終結する。そしてこの溝によってくぎられた西方に1・2号住居址が位置しているということになる。

ところで溝によって区切られた集落を考える場合、比恵型および沼型という2つの異なる形式がある。(註8) 福岡県比恵遺跡は沖積微高地に立地する弥生時代中期の集落遺跡であり、そこでは井戸などを共有する数個の堅穴住居址からなる単位が相互に濠で区画され、1部の調査によれば4単位以上の集合がみられるという。そしてその1区画が世帯をともにする水田の経営単位としてのひとつの世帯共同体である。一方岡山県沼遺跡は溝でくぎられた丘陵の端に大小5つの堅穴住居址があり、そこでは個々の堅穴ではなく、全体がひとつの生産単位をなす大家族的な親族集団である。

花畠里の場合地形的に考えても比恵型ということになろう。この遺跡地周辺においても、その後、発掘地点より北東へ約100m離れた下田尻十字路の防火用水場建設工事の際、V字状の溝が発見されたこともあり、この台地に営まれた集落を区画する溝が縦横に走っていたと想像される。

沼型とおぼしきものは本遺跡から南西2.5kmの入来遺跡がそれであろう。(註9) 時期

は中期初頭から後期にいたるものであるが、台地を横断するV字状の溝状遺構が（中期前半）ある。その内外より袋状円形貯蔵穴・楕円形堅穴・方形住居址などが発見されている。

以上ふたつの型式を述べ比喩型にあてはめて考えてみたが、発見の端緒となった炭化米出土の堅穴がひとつの区画の中のものであるとすると、その質量や遺跡地周辺の土器の散布状況などと考えあわせ、溝で区画されたかなりの大集落があり、農耕を主体とする生活がいとなまれていたことが予想される。

(3) 鉄 斧

本県における鉄斧の出土は、はじめての例である。以前大崎においても鉄斧が発見されたということがいわれているが、出土地、出土層、伴出遺物など不明で十分な資料とはいえない。住居址内からほぼ完形の花熟里Ⅰ類の菱形土器と約50cmの間をおいて出土したことはその資料としての価値の重要性を示している。

こころみに弥生時代鉄工具出土遺跡地名表（註10）を調べてみると、鉄斧の出土例は7例にすぎない。時期は前期1、中期1、後期1、中～後期1、不明3となり、出土状態は丘上および丘上集落址2、住居址？1、箱式石棺1、カメ棺墓地1、不明2となっている。

弥生時代はその当初から金属器を使用することがその文化の必要性のひとつであり、生産技術の中核をなすものであった。鉄製品はその化学的性質によって消滅しやすい傾向にあり、現在までに残存するものはまれである。しかしながら北九州においては中期後半以後は顕著にあらわれる。

さて、その鉄製利器の普及度を考えてみると先進地域では中期後葉、全般的にみても後期になると多くの分野で石器が姿をけし、銅錫などを除いては青銅器や銅器が利器、武器として発達することがなかったので、石器の消失はそのまま武器をふくむ鉄器の普及を意味するといわれている。（註11）そして南九州においても後期には石器の確実な出土例がみられないことは、それだけ鉄器の普及度を示すと考えられる。本遺跡においても砥石1個たたき石2個をのぞいて石器の出土がなかったことは鉄製利器の普及を示していると考える。

一方、金属器生産技術の面から考えてみると刀子・鉈のような小重量の小型鉄器はともかく、本遺跡の鍛斧のようなかなりの重量のあるものが製作可能であったろうか。またその鉄素材はどこに求めたであろうか。

弥生時代の金属器生産技術は、弥生中期「ふいご」と木炭によってかなりの高熱が得られ銅鐸の鋳造からもあきらかである。しかし鉄器生産面からみると「ふいご」の使用によって鉄鉱石の精練が可能であるかどうかは明らかでない。それらの問題を日本の考古学Ⅱ「弥生時代」（註12）によってみると、原鉱処理の問題として鉄器生産は⑦弥生時代の当初から地金の生産と加工が一貫しておこなわれた。①弥生中期以後国内での鉄地金の生産と鉄器の製作がなされた。②弥生時代の全般を通じて鉄地金は舶載品が供給された。と見解の対立がある。いずれにしても薩摩半島西海岸においては、すでに前期初頭において高橋貝塚で鉄製品の発見があり、北九州などの先進地域とほぼ同時に存在が知られているのであるが、その後の文化の後進性、隔絶性から考えれば、鉄製利器とくに鍛斧などは相当な貴重な農耕

具であったにちがいない。つけ加えれば種ヶ島広田遺跡（中期）では3個の鉄製釣針が発見されている。

(4) 土器型式

本遺跡における土器の出土は多種にわたっているが、その中心をなすものは甕形土器と壺形土器であろう。特に甕形土器は多量に発見されている。前に分類した甕形土器Ⅰ類、Ⅱ類壺形土器Ⅰ類、Ⅱ類について今まで発見された資料や、弥生式土器集成図録などを参考にしながら、どの時期にあたるか考えてみたい。まず本遺跡の壺形土器、甕形土器の特徴を再度要約してみると

- 壺形土器第Ⅰ類一肩部に2～3条の三角凸帯をもつ。口縁部が大きく外反し肩部が張る。丸底およびとがり底。

第2類一肩部に2～3条の刻目凸帯をもつ。

- 甕形土器第Ⅰ類一やわらかい「く」の字状口縁部、中空あげ底。

第2類一「く」の字状口縁または直行する口縁の肩部および肩部のくびれ部に刻目凸帯をもつ。

さて、上の土器群が土器型式の編年上、どの位置をしめるかについての論及方法として、凸帯文に着目し、その面から追求してみたいと思う。弥生式土器集成図録（註13）を参考にして本県における突帯文についてまとめてみると、次の表のようになる。

※ 鹿児島県における弥生土器の凸帯文について

種別 時期	壺 形 土 器	甕 形 土 器
前 期	<ul style="list-style-type: none"> ○凸帯文なし？ ○沈線文による腹部、頸部の文様 <ul style="list-style-type: none"> ・範描文、平行斜線文、鋸歯文、綾杉文 ・格子目文、貝殻腹縁文（高橋） 	<ul style="list-style-type: none"> ○刻み目凸帯（高橋）（東昌寺） ○肩部沈線（高橋）（東昌寺）
中 期	<ul style="list-style-type: none"> ○三角凸帯（山ノ口） ○台形上の凸帯（田原） ○口唇状の凸帯（田原） ○三角形の特殊な絡繩凸帯（一ノ宮） 	<ul style="list-style-type: none"> ○刻み目凸帯（入来） ○三角凸帯（山ノ口）（入来）（益丸） ○台形状の凸帯（山ノ口）（成川） ○特殊な絡繩凸帯（一ノ宮）
後 期	<ul style="list-style-type: none"> ○三角凸帯（成川）（串木野）（指宿） <ul style="list-style-type: none"> （花熟里第Ⅰ類） —弥生式土器集成Ⅳ— ○刻み目凸帯（万ノ瀬川川底）（花熟里第2類） ○絡繩凸帯 一倒卵形の器体— <ul style="list-style-type: none"> （尾下）（中津野）（成川） ○幅の広い凸帯 一平行斜線文、竹管文 <ul style="list-style-type: none"> 斜格文をほどこす— <ul style="list-style-type: none"> （成川）（城元）（笠貫）（大根占） 	<ul style="list-style-type: none"> ○凸帯なし「く」の字状口縁で中空のあげ底—（中津野）（谷山薬師堂）（木谷）（唐湊）（成川）（尾下）（永田川）（花熟里第Ⅰ類） ○絡繩凸帯 一「く」の字口縁—（尾下）（花熟里第Ⅱ類） ○絡繩凸帯 一バケツ状の器形—（笠貫）（宮内） ○幅の広い凸帯 一バケツ状の器形—（県立医大）（山根）（指宿）

甕形土器から説明してみよう。

縄文晩期の後半から簡単な凸帯文土器の文化が愛知県以西から九州にかけてほぼ齊一的に分布し、最古の弥生式土器といわれるものがほぼ同じ分布圏に成立したということがいわれております、両者の密接な関係を物語っている。本県においてもすでに福岡県の板付遺跡と同じく高橋貝塚において晩期夜臼式と彌生前期高橋Ⅰ式との共伴があり、晩期凸帯文より引き続いた弥生前期凸帯文文化を証明している。このことは特に本県西海岸地方に多くみられ、北九州を弥生文化発祥の地とするならば、その文化はいち早く南下してきたことがうかがわれる所以である。

前期における凸帯文は刻目突帯を主とし、その刻目も浅く、丹念にたてに押捺されているのが一般的特徴である。

中期になると刻目のない突帯文が壺、甕をとわず盛行しはじめる。凸帯の断面形も三角形、台形と変化にとみ、凸帯の数も肩部に3本と増加し、壺には田原の例でもあるように頸部から胴部まで一面に13本も附しているものもある。しかし中期初頭においては、入来遺跡の例に知られるように前期の影響をうけつづき刻目凸帯のあるものがあり、刻目のない凸帯とともに混在して、前期から中期への移行過程を示しているように思われる。（註14）

また特殊な凸帯としては一ノ宮遺跡例にみられる、三角凸帯を上下から箆か指でつまみあげるような技法の縄目をモチーフとしてより強調するようなものがあり、出土例の少ないことから注目されている。この凸帯は壺にも同様である。

後期に目を転じよう。後期の甕形土器は中期に比して器形が簡素になり統一されてきている。

凸帯も纖細でなく荒く太い。いわゆる紐状の粘土を肩部にまき、あるいは巾の広い凸帯を付している。そして刻目が付されているものもあるが、前期のそれに比して粗雑で斜位に荒くなっているのが特徴である。胴部から口縁部へかけて直線的にのびるバケツ状の器形があらわれてくる。甕の用途としての実用性だけを重んじた感じである。凸帯の全くみられないものもある。

さて凸帯という面より甕形土器について概観してみたが、花熟里Ⅰ類、Ⅱ類はどこに位置づければ良いであろうか。Ⅰ類、Ⅱ類ともに中空の上げ底という決定的特徴をもっている。これは一般にいわれている後期初頭よりはじまる甕形土器の形態の要素であり、したがってⅠ類、Ⅱ類が後期に位置することはまちがいない。しからば後期のどのへんであろうか。

Ⅱ類より述べてみよう。この刻目凸帯またはバケツ状の基型は笠貫（註15）宮内（註16）出土の甕と同様のものであり、それらが共伴する幅広い凸帯を有する成川式や、倒卵形の器体に1条の絡縄凸帯の壺形土器より、後期の後半にあたるものと考えられる。

一方Ⅰ類土器は表に示すように多くの遺跡で発見されている。出土状況から考えると層位的にⅡ類より下位にあり、住居址に密着したかたちであらわれているものが多い。したがってⅡ類よりも古い形態のものではないかと考える。これについては住居址より共伴した壺形土器との関係もあり、あとで述べてみたい。

さて、壺形土器における凸帯文をみてみよう。前期においては凸帯文ではなく（一部球形の器体と頸部のつぎ目に凸帯を付すものがある。）

そのほとんどは籠および貝殻による沈線文によって文様がつけられている。このことは壺形土器が縄文晚期の影響をそのまま受け続けるのにくらべ、壺形土器は弥生文化の発生とともに生まれてきたものであり、全く新しい用途をもった新しい器形のものであるからであろう。

したがって従来の伝統的な技法にとらわれることなく自由な装飾文様を器面に描くことができたと考えるのである。

ところが中期になると、前述した田原の土器などにみるように多くの凸帯を附し、その凸帯の種類も三角、台形、口唇状と種類に富み、器形も大型化してくる。これは中期が弥生文化の波及によって各地に農耕文化が定着した時期であり、その地に独特の土器文化を根づかせる社会的条件によるものではないかと考えられる。また、その凸帯文の特徴は前期、後期に比して刻目をもたない点にある。（Ⅰ部口縁部突帯の刻目・成川出土のものを除いて）これは壺形土器にもいえることであり、後期に比して明確な特徴のひとつかと思う。

後期になると壺の大型化とともに幅の広い凸帯（成川式）をはじめ、紐状の凸帯（絡縄突帯）がある。これらの凸帯には成川式の竹管文等をほどこした幅の広い凸帯をのぞいて、壺形土器の刻目と同じような、荒い、深い斜位の刻目を附している。中には万ノ瀬川川底からの採集品にみられる、刻目を附した施文具によって刻目をほどこしたものもみられる。

本遺跡における壺形土器1類は集成図録による第Ⅳ様式、後期前半の成川出土のものと酷似している。しかしそく観察すれば成川出土の三角凸帯の施文位置は胴部にあり、また重心の下がる肩部の張りの少ない器形をしている。器体が細長くなり、重心が下がる傾向のいわゆる倒卵形のものは、すくなくとも後期半ば以降とみると集成図録V様式によってあきらかである。1類はそれにくらべて肩部の張りと三角凸帯、口縁部の強い外反を特徴とする点から後期前半として、Ⅳ様式およびそれよりも古式の形態をもつものと考えたのである。さらに中期における三角凸帯の盛行という前提にたてば、より中期の特徴を継承しているものと考えざるをえない。しかし底部が丸底、あるいは丸底に近い尖り底など後期の一般的特色を有している。

一方壺形土器との関連より考えれば、住居址内においても壺形土器1類と共に出土するものであり、セットとして考えられるので、この壺形土器1類は必然的に同じ時期に位置づけられなくてはならない。

壺形土器2類は肩部凸帯に刻目をもつものであるが、1類より比較的上位に出土し、破片も小さいものが多いという出土状態から1類のあとに位置づけた。これは刻目のない中期凸帯から刻目のある後期凸帯への変遷より考えても証明される。そして刻目を有する施文具による施文手法のあることは万ノ瀬川川底出土（註18）のものと同じタイプと考えてさしつかえない。

この壺形土器2類は、壺形土器2類とあわせて1類より層位的に上位にあることから1類→2類の型式編年が予想される。

以上述べてきたように本遺跡の壺形土器1類、壺形土器1類をいちおう後期前半に比定し、2類をその後続と論をすすめてきたわけであるが、ここには複雑な問題点がなお多く存在するのである。

そのひとつは、土器の出土状態が2層における上位と下位の別という分け方であり、地層に

よって明確に区別できるように出土しなかったことである。

したがって1類と2類が同じ第2層から出土しているということともいえるわけである。

また1類壺形土器のセットとして壺形土器1類をあげたのであるが、中津野遺跡（註19）尾下遺跡（註20）などにおいては、長楕円形の器体の胴部に1条の絡繩凸帯を有する壺が共伴していることである。このことは壺形土器1類を後期後半にまで下げなければならないことになり、そうすると壺形土器1類も後半に、もってこなければならぬというジレンマにおちいるわけである。しかし後期における壺の変化にくらべ、実用性を主とし、ほとんど飾られない壺形土器は器形の変化が少ないと考えられる。なお九州全体の後期の壺形土器を見る場合、この中空の上げ底を有するものは弥生終末におよぶと考えられておりながら後期後半には存在しないとはいきれない。いずれにしても本遺跡においては、後期前半と思われる壺形土器と共に伴したことは事実である。

つぎには壺形土器1類の肩部三角凸帯が別々に3本の粘土紐をはりつけたものでなく、巾広い凸帯を附して、それを3つの三角凸帯に調整して作りあげているという技法上の特色を持っている土器もあるということである。これは中期の凸帯作成法よりも後期の成川式などの巾広い凸帯はりつけに通ずるものではないかと考えるが、そうすれば後期においてもより新しい技法と考えざるを得なくなってくるのである。この点についてはもう少し追求してみる必要がある。

これらの問題点を究明するためには、中期後半から後期にかけて、また後期から古墳時代初期にかけての遺跡を発掘調査するより方法はないと思われる。本県においては縄文時代にくらべて弥生時代の調査はあまりなされていないようと思うが、土器型式の編年をはじめとして、当時の集落址の究明から社会のありかたまで研究を進めていきたいものである。

この報告書を書くにあたり、遺物および実測図等貴重な資料を提供してくださり、さらに作図、文章などこまかいところにわたって指導してくださった河口貞徳先生に深く感謝するとともに、炎暑の中、汗をながして発掘に参加した人達にあつく謝意を表するしだいである。

註

(文責 出口)

- (1) 大場盤雄、内藤政恒、八幡一郎編 新版「考古学講座4、原始文化<上>」(昭和41年)
- (2) 吹上高校社会研究部誌「ふきあげ7号」(昭和44年)に尾下遺跡、宮内遺跡に壺形土器の完形品が記載されている。
- (3) 小林行雄、杉原莊介編「弥生式土器集成、本編1、南九州地方」(昭和43年)
- (4) 和島誠一編 日本の考古学Ⅱ「弥生時代」(昭和41年)
- (5) 河口貞徳編「鹿児島県考古学会紀要2」(昭和27年)
- (6) (4)に同じ
- (7) (1)に同じ
- (8) (4)に同じ
- (9) 考古学ジャーナル No.52 1971
- (10) (4)に同じ
- (11) (4)に同じ

- (12) (4)と同じ
- (13) (3)と同じ
- (14) 河口貞徳氏の御教示による。
- (15) (5)と同じ
- (16) (2)と同じ
- (17) 吹上高校社会研究部に収蔵されている。
- (18) (17)と同じ
- (19) (5)と同じ
- (20) (2)と同じ